

# ワールドゲームズ秋田！

木村佳司

炎暑の秋田に、オリエンテーリング世界最高の技が集まった。  
世界最高の技が集う、4年に1度のマルチスポーツイベント  
「ワールドゲームズ」に初めてオリエンテーリング競技が加わった。  
オリエンテーリングの新しい歴史が秋田から始まった。

## オリエンテーリングがメジャースポーツへ一歩前進？

オリエンテーリングが新聞の一面を飾った。秋田魁新報 2001年8月19日朝刊の一面は、前日のワールドゲームズ・オリエンテーリング種目で快走した、 Grant・ブルエット（オーストラリア）のフィニッシュシーンだった。

ワールドゲームズの開会式はNHKで全国中継され、八橋陸上競技場の中をIOFの旗が行進するシーンが放映された。

秋田の街に繰り出せば、ワールドゲームズのショップがあり、空手やパラシューティングなどに並んで、オリエンテーリングのピンを販売している。

これは事件である。今の日本のオリエンテーリングを取り巻く環境からすれば、破格の扱いである。やはり自治体が直接開催する、国際マルチスポーツイベントは、今までの国際オリエンテーリング大会とは違っていた。



## ワールドゲームズの金メダルはノルウェーとオーストラリアに

そんな中、競技も世界最高の選手たちを集めて行われた。テレインは秋田の飯島砂防林。通行可能度、地形など、国際大会を行うには申し分無いテレインだった。

18日に個人戦が行われ、19日に男女混合の4人リレーが行われた。

18日、約500名の観客の見守る中、優勝したのは、男子 Grant・ブルエット（オーストラリア）、女子 ハンネ・スタッフ（ノルウェー）であった。

19日に行われたリレーでは、総合力で勝るノルウェーが接戦を制した。



Grant・ブルエット（オーストラリア）

日本は地元の利を活かした戦いが期待された。しかしながら世界の壁は高く、その差を見せつけられる結果となった。地元・秋田出身の加賀屋選手は、リレーでは快走したものの、個人選では力を出しきることができなかった。



個人戦・加賀屋のフィニッシュ

## 世界の選手を翻弄する秋田のテレイン

秋田の飯島砂防林のテレインは日本離れした地形と植生状態を持っている。この秋田のテレインはコースの組み方次第で、どのような課題も選手に課することができる素晴らしいテレインであった。

18日に行われた個人選は、視界の利かない場所での微地形を読む力を試すようなレグが多く、世界のトップ選手がこれに大きく翻弄されたことが、タイムに如実に現れている。特に女子はタイムがかなりバラけている。

多くの選手が撃沈する中、日本の松澤はそれなりの結果を残した。





個人戦・松澤のスタート



個人戦・金並のスタート

また、男女混合リレーはガンガンとスピードを上げて、森の中を突っ走ってゆくようにコース設定されている。難易度は個人選に比べて易しめになっている。このため差の着きにくいレースが展開され、観客に見せるレースになった。上位国は男子のスピードが殆ど変わらないため、女子のスピードの差が勝負を決めた。

3走時点まで、ポーランドとリトアニア、ノルウェーが優勝争いをしていましたが、やはりこの争いを制したのは地力に勝るノルウェーだった。リトアニアは男女4名のタイムを揃えてきて、銀メダルを獲得した。3位は何とか最後にスウェーデンが滑りこんできた。



加賀屋、日本の第1走



男女混合リレーのタッチ



男女混合リレー優勝を決めたノルウェーチーム



大接戦のリレー

## 暑かった秋田

ワールドゲームズ・オリエンテリング種目が行われている間、秋田は真夏の猛暑に襲われた。会場となった秋田県立大学の陸上競技場周辺に日陰は少なく、特に観客にとって厳しい天候だった。それにもかかわらず500名の観客が集まり、午前には世界のトップ選手の走りを見て、午後からは同じトレインを使用した体験イベント・併設大会に参加した。



日傘をさして、ビジュアルコントロールで選手を待つ。



500名の観客が、ワールドゲームズで最初のオリエンテリング競技の目撃者となった。

トレインが秋田の海岸近くであったことから、体験イベント参加者や、ワールドゲームズ選手が、競技終了後に海水浴をしているシーンもあったようだ。

## 運営者から見た ワールドゲームズ

村越 真

ワールドゲームズがいかなる大会になるのか？それを大会前に正確にイメージできた人はいない。地元組織委員会(AOC)でオリエンテーリング担当となったスタッフはもちろん、地元秋田県協会やJOAが派遣した役員にも、大会が実際に始まってみるまでその全体像はつかめていなかった。全ての組織の、扇の要の位置にいた10Fの技術代表者である僕ですら、ワールドゲームズでのオリエンテーリングがどんな大会になるのかは完全にはイメージできていなかった。ここに、オリエンテーリングが単独で行うワールドカップや世界選手権と、ワールドゲームズとの大きな違いがある。



通常の国際大会と違って、選手の宿泊や秋田に入ってから交通は地元AOCが責任を持っている。選手にしてみれば、あごあし付きで、大会参加費が無料。その分AOCにすれば、選手の行動を確実に把握する必要がある。オリエンティアなら、「まあ秋田駅にすればインフォに寄って、地図を手に入れればどんなところでもなんとかがいけるよ」と思うかもしれない。だから、AOCがいくら旅程を把握しようとしても、いい加減な旅程が大会直前になっても出づづ、担当者を悩まし続けた。2年前から始まった地図調査の段階でも、海外から来た調査者がそこの旅館に泊まって、勝手に交通手段を確保して調査しているというのが、AOCにはどうも理解できないようだった。国際総合スポーツ大会の一員となるということは、自分たちの習慣と文化を見直す絶好の機会と

なった。私自身、AOCの担当の方とのやりとりの中で、改めてオリエンテーリングの特殊な部分を再認識した。

AOCの担当者である渡部氏は、元々オリエンテーリングには全く関係ない、いわば素人だった。しかし担当者となるや、10Fのホームページからオーマガジンのホームページまで閲覧し、今や並のオリエンティアは及びもつかないほどのオリエンテーリングに関する知識の持ち主となった。彼とオリエンテーリング側のスタッフが、両者の考え方の違いによって発生するトラブルを根気強くかつ柔軟に対応した成果、それが今回のワールドゲームズの成功である。予定調和的な分かり切った成功ではなく、そのようなプロセスを経た上での成功である点に、今回のワールドゲームズにおけるオリエンテーリングの大きな意義があると、僕は考えている。

もちろん、大会の成功は運営者の努力だけによって生まれるものではない。参加者が素晴らしいレースをしない限り、オリエンテーリングをアピールするというワールドゲームズの主旨は達成されないだろう。世界選手権後の動機づけが低下しがちな時期で、かつ彼らが経験したことのない猛暑の中でのレースにも関わらず、個人、リレーとも素晴らしいウィニングタイムが出た。

ワールドゲームズの成功に参加者は大きな貢献をしたと言える。またレース後の疲れた中で、地元小学生の体験イベントに指導者

としてむしろ喜んで指導を引き受けてくれた選手には、エリートのあるべき姿を見た気がした。

個人戦のレース前、運営者サイドから観客のスタンドを見るとその数に感動した。

観客席のにぎやかさは、見るスポーツとしての地位が確立している他のスポーツのそれとなんら変わらなかった。個人戦の日に会場を訪れたフローリック国際ワールドゲームズ会長は、おそらくこの光景に意外な印象を受けただろう。観客・併設大会参加の方々もまたワールドゲームズ成功には大きな役割を果たしたと言える。



このWGが、本当にオリエンテーリングが五輪入りするための大きなステップとなるのか、またオリエンテーリングは五輪を目指す中でそのアイデンティティをどう保つのか、これらの点は引き続き議論が必要である。しかし、停滞しがちな日本のオリエンテーリングの中で、様々な可能性をこのワールドゲームズ見せたことも事実であろう。地元はもちろん、日本のオリエンテーリング界が今回のワールドゲームズを一つの資産として活用していくことを期待したい。



男女混合リレーのスタート